



短歌作者への助言

佐藤佐太郎著

著者略歴

明治42年宮城県に生れた。大正15年アララギに入会し、斎藤茂吉に師事。昭和15年第1歌集「歩道」を発行、昭和20年5月、歌誌「歩道」を発行し主宰す。

戦後に歌集立房、帰潮、地表、群丘、冬木を刊行したが「帰潮」は第3回読売文学賞を得た。他に「短歌指導」随筆集「枇杷の花」歌集「形影」など著書多し。

短歌作者への助言

昭和46年2月20日 再版

著者	佐藤佐太郎
発行者	石黒清介
印刷所	日本新聞印刷KK
発行所	短歌新聞社

東京都国分寺市本町3の12の9
振替口座東京21683番
電話 0423 (21) 1694番

定価 800 円

序

これは雑誌の編集後記として書いた短文を集めたものである。後記などは何を書いてもいいようなものだが、私はなるべく人々の参考になる実のある文章を書こうとおもって努力した。およそ昭和三十五年あたりからはつきりと助言をおくるという意図のもとに書いて来たのである。六百字を限度とするわくのきまった短文だから、あるときは十分に意をつくし得ない場合もあり、また言うことが説教じみたり自慢話になったりしたところもある。恥かしいことだが、これも必然のいきおいでしかたがなかった。また、片々たる小文章だが全く捨ててしまうのも惜しい。道元禅師の「正法眼蔵」はみな人に教えた文章である。そういうものを連想するのは不遜だが、私の文章も、助言とはいっても実は自身のために問題を解決するという態度で書いたものであった。私の仲間以外の人々に読んでいただいてもいくらかの参考にならないものでもあるまい。

昭和四十五年八月吉日

佐藤佐太郎記

目次

序	一
短歌作者への助言	
胸中の茂吉	二三
人間的	二四
辛抱	二五
純粹短歌	二七
勉強の仕方	二八
型を排す	二九
流行（I）	二九
素人の歌	三〇
茂吉の言葉	三二
工夫	三三
言葉（I）	三四
力量	三五

慰 藉	二六
苦心と難渋	二七
言葉の新しさ	二九
自然流露	三〇
解 釈（主観）	三一
詠 歎	三三
先取権	三四
いぶき	三五
一つの立場	三六
作歌永続法	三七
作歌の意義	三八
写生の効能	四〇
歌 友	四一
読むこと	四二
言 葉（Ⅱ）	四三
変 化	四四
月々の作歌	四五

素材（Ⅰ）	突
手本を学ぶ	𠂔
模倣	𠂔
文語	𠂔
自負	𠂔
言葉のひびき	𠂔
素質	𠂔
選者の言葉	𠂔
虚偽	𠂔
自然	𠂔
自身の眼	𠂔
選歌（Ⅱ）	𠂔
新しい言葉と詠歎	𠂔
スランプ	𠂔
手帳	𠂔
流行（Ⅱ）	𠂔
言葉の選択	突

勉強法	六
丹念な作歌	究
幸運	七一
我執	七三
仲間	七四
為事を楽しむ	七五
修飾・解釈	七七
修練（I）	七八
写生の態度	九一
休止・句切れ	九六
作歌力	一〇二
斎藤茂吉	一〇三
素質	一〇四
懷疑動搖	一〇五
短歌の形式	一〇七
作者の影	一〇八
道程（I）	一〇九

道程(Ⅱ)	九一
作歌談	九三
出版物	九四
人それぞれ	九六
専門家	九七
自作	九八
瑣末事	一〇〇
選歌(Ⅲ)	一〇二
短詩形	一〇三
他作	一〇五
努力	一〇六
本物	一〇八
斎藤茂吉歌集	一〇九
読むこと	一一
作歌姿勢	一三
結社	一四
歌会	一五

仮名遣	二七
表記法	二八
個性（Ⅰ）	二九
個性（Ⅱ）	三〇
主観的表現	三一
言語の感情	三四
素材（Ⅱ）	三六
説明と演出	三七
茂吉の歌	三九
短歌観	三九
文字の歌	三九
事実其儘	四〇
言葉のテンポ	四一
批評	三七
自ら学ぶ	三九
歌の鑑賞	四〇
歌風の推移	四二

句切れ……………	一四
音便（語感）……………	一四
修練（Ⅱ）……………	一五
推敲……………	一五
限定（表現）……………	一五
修練の方法……………	一五
詩的眞実……………	一五
茂吉晩年の歌……………	一五
比喩……………	一五
悟入……………	一五
「如し」……………	一六
短歌的雰囲気……………	一六
歌の読み方……………	一六
文法（Ⅰ）……………	一六
文法（Ⅱ）……………	一六
易行道……………	一七
作歌眞……………	一七

短歌のひびき……………一七四

のろいことば……………一七六

単純な短歌……………一八〇

通俗性について……………一八三

短歌の新しさ……………一八五

選歌随想

歌の楽しさ……………一九六

勉強のひとつ……………一九七

作者のいぶき……………一九九

短歌の言葉……………二〇〇

言葉について……………二〇一

自分の歌……………二〇三

用語……………二〇四

外国語……………二〇五

確かさ……………二〇七

評語……………二〇八

短歌作者への助言

短歌作者への助言

胸中の茂吉

「白石先生詩範」に「詩ハ性情ヲ述候モノニ候。平生ニ胸中ニ唐詩ミチミチ候テ有之候得バ、ソノ性情ノ流レ出候時ニ、カノ胸中ノ唐詩ノ中ヲ通り候テ出候間、イヅコトモナク唐詩ノ風味有之モノニ候」という一節がある。私はこの「胸中ノ唐詩ノ中ヲ通り候テ出候」というのが面白いと思う。これを短歌に移して考えれば、私たちは平生に万葉集を読み斎藤茂吉を読んで、万葉・茂吉が胸中に充ち満つる状態に居るのがよい。そうすれば自分のものもおのずから万葉・茂吉の風格・声調を得る事が出来るのである。これが短歌勉強の要諦である。

そんな模倣をしていては大切な個性は表わし得ないではないかと考えるのは戯論というものである。力量が備わらなくては個性々々などといっても実は個性などはどこにもないのである。「独学固陋」におちいって、自分免許で個性々々といって見てもてんで物にもならないものを作

って喜んでいるようでは何時までたっても進歩はない。

僧良寛や平賀元義の歌は胸中の万葉を通して出てきたものであった。私もやはり「胸中の茂吉の中を通り」て自身の歌を作って来たと思う。この行き方はこれからとも同じ事である。胸中にたくわえるものは、大きく分ければ物の見方と語気との二つに分けて考えられるが、胸中の茂吉を通して物を見、言葉をつづけるのが私たちの行き方である。

短歌で声調・調子というのは語気ひびきであるが、調子は茂吉なら茂吉を全体として胸中にたくわえて胸中に充ち満つるような状態にいて、さて作る歌はその胸中の茂吉を通して作るという事になるのである。（昭和二十七年五月）

人間的

作歌においては惑わず動揺せずに大道を進むべきで、そのためには世評などを顧慮する必要は毫末も無い。しかし、自分の正しいと思ひ努力した跡が人に認められるのは矢張りうれしい事である。私は「帰潮」の境地を以て満足しているのではないし、私はまだ非力である。けれども私なりの一応の成果として「帰潮」が認められた事については感謝しなければならぬ。そして今後は心を新たにして作歌に微力を傾注したいと思っている。作歌の道程においては、もうこれで